# 佐藤文隆氏ロングインタビュー　第1回：少年時代〜高校時代

## 高　橋　慶太郎

〈熊本大学大学院先端科学研究部　〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪 2-39-1〉
e-mail: keitaro@kumamoto-u.ac.jp



今月より，佐藤文隆氏のインタビューを連載いたします．佐藤氏は京都大学林忠四郎研究室の出身で，後に教授として天体核研究室を受け継ぐことになります．専門である宇宙論・宇宙物理学で幅広い研究成果をあげており，特に一般相対論の富松・佐藤解を発見して宇宙物理学・数理物理学に多大なインパクトを与えました．そしてこれまでに数多くの研究者を育成するとともに，京都大学基礎物理学研究所や湯川記念財団の運営に関わり，日本物理学会長も務めました．また著書も多く，宇宙物理学関係以外にも科学と歴史・社会の関わりや量子力学などについて積極的に執筆されています．第1回は戦中戦後の日本社会の様子が垣間見える少年時代から高校時代までです．


佐藤文隆氏略歴

1938　山形県生まれ
1960　京都大学理学部物理学科　卒業
1964　京都大学天体核研究室　助手
1971　京都大学基礎物理学研究所　助教授
1973　一般相対論の富松・佐藤解　発見
　　仁科記念賞　受賞
1974　京都大学基礎物理学研究所　教授
1976　京都大学基礎物理学研究所　所長
1986　京都大学天体核研究室　教授
2001　京都大学　定年退官
　　甲南大学　教授
2013　甲南大学　退職

佐藤文隆氏近影（佐藤氏提供）．

## ●駅前の材木屋

**高橋：** インタビューをお引き受けいただきどうもありがとうございます．まずはお生まれのあたりから伺いたいと思います．佐藤さんは1938年3月23日生まれで，出身は山形県ですね．

**佐藤：** 山形県のね，昔でいうと米沢藩やなあ．で，奥羽本線の赤湯から長井線という支線でずっと行った，鮎貝という駅の駅前で生まれたんです．初めは鮎貝村だったんやけど，戦後6年目に町村合併で白鷹町になった．鮎貝駅はうちのファミリーにとっては大事な存在で，僕の父茂吉の代のときに，ええと1923年らしいけれども，そのへんに移ってきたんですね．もともとは駅から1里くらい山のほうの黒鴨の百姓だったわけだけども，鉄道が引かれてきたというので，製材とか材木屋とかに商売替えして，山の中から出てきたん

です．だから僕が高校まで育ったところっていうのは，ある意味で新開地です．みんな駅ができて来た人やから，全体としては田舎だけども，百姓の伝統的な村じゃなくて，あの頃のニュータウンやなあ．昔の駅は小さな駅でも十数人働いてたからね．だからその駅員の官舎があって，日通（日本通運）があって，運送会社やね．それで旅籠屋があって，昔は国鉄の駅やったら必ずそのワンセットあったんやろな．そういうところで育ったんです．

**高橋：** 駅ができて，人が集まってきた町なんですね．

**佐藤：** そうそう．江戸時代からずっと隣と一緒みたいなのじゃあ全然ない．だからあの時代にしては気風は割合ハイカラだったんじゃない．

**高橋：** 生まれたときにはもうそこにいたんですか？

**佐藤：** そうです．僕は8人兄弟の7番目．僕の兄弟は全部そこで育ったんだと思う．駅のすぐ隣で，田舎の駅でも引込線には倉庫や広い材木置き場みたいな空き地があって，子供はそのへんで遊んでた．

**高橋：** それで，お父さんの材木の事業は成功されてたということなんですか．

**佐藤：** あのう，終戦のときに僕小学2年生なんだわ．そのへんまではっきりとは覚えないけども，まあ金回りはよかったんじゃない？　特に戦後，僕が物心ついて，朝鮮戦争が始まって，そのあたりはものすごくよかった．成金状態やった．というのは東京の戦後復興で，材木，製材の商売はものすごくよかったんです．あのへんの山が丸坊主になるくらい材木を東京に送った．だから何軒かそういう商売がおってみんな儲けた．山の木がなくなったんで，僕が小学生上級か中学生になったあたりかな，学校全体で授業で強制的に植林を何日もやらされた．それほどにあの地域全体景気がよかった．それは僕が学者になるのにものすごく影響してるんだけどね．

**高橋：** 学校で植林をしたんですか．

**佐藤：** うん，そう，結構きつかったよ．学校では，田植え休みとか蚕休みとかもあって，子供の労働力が当てにされてた．それと強烈な印象があるのは疎開の人が一時多かったことやね．

**高橋：** 戦時中の話ですか？

**佐藤：** 戦時中からでしょうけども，たぶん強制疎開なんてのは最後の1年の話だよね．空襲で内地も戦争状態になったのは割合短いんです．負け始めて疎開とか何とかになるのは，敗戦の年の1年くらい前からですよ．なんか戦争という長い時代があったように思うけど，内地ではそうじゃない．バタバタっていう感じで終わっちゃった．で，僕の田舎は疎開を受け入れる方やな．だから学校も人が多くて活気があった．ぎゅうぎゅう詰めみたいな．

**高橋：** 東京から来るんですか？

**佐藤：** 東京でしょうね．それで戦争が終わってもみんながすぐに東京に戻るわけじゃない．焼野原で家もない人もいるわけやからね．だからワーッと一時的に増えて，5, 6年かかって徐々に元に戻ったわけですよ．

**高橋：** 戦時中は何か思い出というか，記憶はございますか？

**佐藤：** 戦時中はあまりないね．僕は兄弟の7番目なんだけど，上の方が女・女だったもんだから，兵隊に取られてないんですよね．1番目の姉は家の商売の手伝いとかで戦争の影響はないけど，次女は女学生動員で看護婦訓練中に終戦になった．その次は1番上の男で，中学生で工場動員やね．で，その下はもう子供だから，戦死者はいなかった．しかし親戚には結構戦死者がいたね．

うちの親父はね，百姓を辞めて駅前に出てきて商売始めたから進取の気性があるというか．父も母かねも両方とも昔の小学校しか出てないんやけど，なんでも二十歳前で十数人の人を使ってた言うてたから．で，僕は物心ついた頃，あまり親というものを意識したことなかったね．というのは，小学校の入学式でも必ずどこか上の兄弟の入学式とかと重なったりするもんだから，だいたい

母親はそっちに行ったり．それから上の兄弟が思春期で親と喧嘩とかしてて，こっちに機会が回ってこないという感じやったね．

**高橋：** まあ当時はみんなご兄弟が多いので，そんな感じなんですかね．

**佐藤：** そんな感じやったね．だから僕は非常に薄いです，親子関係は．

**高橋：** 兄弟で遊ぶとか，そんな感じですか？

**佐藤：** そういうよりもねえ，ここがまた今の核家族と全然違うところなんだけども，戦時中からか戦後かはっきりしないけどね，住み込みで雇われている人がおったんですよ．景気のよかった戦後は特に多かったな．家も事務所もなんか次々と継ぎ接ぎした感じやったね．玄関が3つあるみたいな．一時は女中さんが2人おったり，なんか寄宿舎みたいな感じやったね．だから夕食のときにファミリーでしゃべってとかは全然なかった(笑)．

## ●百科事典と文学全集

**佐藤：** それから疎開者の話で，食うに困って物を売る人も多かったわけね．だから，中古品の売買を仲介する骨董屋さんという人がしょっちゅう家にやってきていたね．親父は羽振りがよかったのもあるから，要るとか要らんとかとは関係なくどんどん買ったりしていた．だからある時期にはハイカラな手動の映写機とか空気銃とか，色々あった．そして，そのうちの1つにね，6畳くらいの応接室の壁がいっぱいになるくらいの蔵書，ちゃんとガラス戸付きの本箱に入ったものを親父は買ったんやな．自分が見るとか子供に読ませるとかの意識は何もない．ここに置くのがいいとか骨董屋に勧められたんだろうね．とにかくそこに置いて．主に高い本やった．

**高橋：** 文学全集とかですか？

**佐藤：** そうそう．平凡社の百科事典数十巻とか，昭和の初期の立派な本だったな．それから玉川児童百科とかには図鑑みたいなカラー刷りの頁もあった．それから文学全集ですわ．よく読めないけども，『里見八犬伝』とかの挿絵を見ていたね．とにかくいっぱいあった．親父はそれら本箱ごと買ったけど，子供らにそれで勉強せいなんて言うわけでもなかった．単に置いてある感じ．でも僕はこの蔵書を覗いて，自分の周りの世界でない世界があるんだというのの，空想になったんですね．

**高橋：** もともと本が好きでいらっしゃったんですか？

**佐藤：** いやあ，そんな気なかったよね．

**高橋：** じゃあ家にその百科事典とか全集が入ってきて，興味を持ったと．

**佐藤：** それは全くそうです．その頃から本が好きになった，本当に．それとなんか身の回りと違う世界があるんやと思うようになった．それでローカルなことに興味がなくなったですね．山を歩いたりとか，小学校6年の時かな，先生が引き連れて朝日登山とかあったけども，あんまり素晴らしいとも何とも思わなかったね．なんかひたすら外の世界に憧れ始めてたね．だからそれはものすごく自分を決めたんだと思う．

**高橋：** いろんな本があったわけですね．

**佐藤：** 主に児童百科事典です．ほんまにあの頃にしてはよくできた印刷でしたね．カラーの大きな図で，カラー刷りは貴重だから，そこにハトロン紙っていうのがはさんであって．

**高橋：** 百科事典だったら文化的なものとか自然みたいなものとか，いろんなものがあるわけですよね．

**佐藤：** 自然ものもあったけど，むしろ西洋の文物とかです．見たことのない建物とか，昔はテレビもないから，そういう映像ってのはすごいインパクトだったよね．

**高橋：** それは写真なんですか，絵なんですか？

**佐藤：** ええとね，カラー写真ってあったのかな？細密画みたいなものもあった．それで僕は大人になってからも世界史の流れとかよく勉強したけど，なんていうかなあ，そういう出版物はヨーロッパ文化礼賛みたいな本ですよ．戦前は国粋主

義で軍部が威張ってたとかいうけど，それは昭和10年以後やね．第一次世界大戦後，昭和10年までっていうのは非常にハイカラな時代で，あの蔵書類はその時代の産物やと思うわ．日本は第一次世界大戦では連合国軍だったわけですよ，イギリスとかフランスと一緒にドイツと戦ったわけですから．だから，西洋文化への連帯感がすごくあった時代があったんやね．

それとこれは湯川・朝永生誕百年のイベントを準備するなかで彼らの子供の時代に興味持って調べると，当時すごく円高なんだよね．小川（湯川）秀樹が，今でいうと高校1, 2年生の物理の勉強を英語の教科書でやっているんですよ．有名な人の本じゃなく，アメリカの工専系の学校のテキストですね．

**高橋：** それは個人的に取り寄せたんですか？

**佐藤：** いや授業の教科書．彼はそのころ自分で英語の量子論の解説書を買って読んでる．丸善で高校生がふらっと英語の本が買えた時代なんだ．

**高橋：** 普通に買えたんですね．

**佐藤：** 僕らが学部の学生の頃なんか一番円安の時代だったでしょうね．英語の本なんかは大学に行かないとなくて，助手になってからも必ず大学の図書委員に言って買って貰うしかなかった．ところがね，僕も初めて知ったんだけども，どうも湯川・朝永の学生時代は丸善とかで背伸びした高校生が結構洋書を買っていたらしい．湯川記念館史料室に「小川秀樹」と記名したたくさん書き込みのある英語の本が残っているんです．調べたらアメリカの高等専門学校あたりでひろく使われた教科書らしい．

僕が接した百科事典などもそういうような欧米礼賛の時代のものでしょうね．それが4, 5年もすると鬼畜米英に急変するんだ．実際，第二次世界大戦が始まるあたり，近衛文麿が人気で何べんも組閣して毎回うまくいかんで，それで近衛の後が東條英機ですよね．それで当時，近衛の長男の文隆はプリンストン大学に行ってるのね．

**高橋：** そうなんですか．

**佐藤：** うん，全く欧米流なんですよ．それがあっという間に鬼畜米英になるんだから．ちなみに僕の名前はこの文隆を真似たんだ．

**高橋：** え，そうなんですか？　その頃のことは，直接はご存知じゃないわけですよね．

**佐藤：** 知らない，知らない．

**高橋：** そういう立派な本が家に入ってというのは小学校時代ですか？

**佐藤：** 小学校の高学年だったと思う．

**高橋：** お父様は本を読まれるような方なんですか？

**佐藤：** あのう，そんな暇のない境遇やったけど，そういう志向のある，上昇志向の強い人だったと思います．親父は学校は小学校高等科しか出てないけど，自分の姉はあの頃珍しく師範学校に行って，教員をしていたんですよ．また，弟を東北帝大に出しているんです．自分の稼ぎでですよ．自分は小学校出だけれども，姉を師範学校へ，弟を帝大へやってるのね．

**高橋：** 佐藤さんの叔父さんの世代で帝大っていうのは，たぶんかなりすごいですよね．

**佐藤：** あんな田舎ではそうでしょうね．それで文部省に入って官僚になった．あの頃の文部官僚は新しくできた大学の先生と行ったり来たりしているみたいね．叔父は初め虎ノ門で官僚をしていて，それで大連に商科大学か何か作るのに関わって，自分もそこで教授になるんです．それで終戦間際に病気で死んだらしい．

それで僕の小学生の頃のことだけど，ある日ね，仏壇がある部屋に1メートルもある大きな油絵の肖像画がね，4つバーッと掛かったんですよ．それも東京から疎開してきてる絵描きさんが食い詰めてそういう肖像画を描いて食いつないでたんだろうね．それで一番最初に石原莞爾，それからおじいちゃんおばあちゃん，それとさっき言った帝大出の弟である傳吉．

**高橋：** へ〜．でもなんで石原莞爾なんですか？

**佐藤：** ええと，ややこしいんだけど，日中戦争と

かの歴史を読むと，戦争勃発の張本人として初めの方に必ず石原莞爾が出てくる．彼は山形県出身で，それで陸軍内部の権力闘争で，東條英機と争って敗れるのね．それで割合早く退役して，山形県に帰るんですよ．それでうちの親父のあたりの世代の青年団的な人たちがわーっと私淑して集まるわけ．東亜連盟とかいう運動体もできたりして．それでうちの親父は割合熱心なメンバーだったようで．そのせいかどうかは知らんけど，親父は戦後しばらく公職追放だったんです．

**高橋：** お父さんが公職追放になったんですか？

**佐藤：** うん，そうだったです．戦前は総力戦やから，村の青年団とか村会議員とかで戦時協力組織の役員とかしてたんじゃない？　で，数年後に講和条約で日本が独立すると公職追放は明けて，すぐに教育委員長，町会議員，町会議長になったんです．

**高橋：** アクティブだったんですね．

**佐藤：** うん．それと僕は中学生のころ，辻政信に会ったことある．ノモンハン事件のときに参謀をやってて戦後戦犯になるんだけども，すぐ復活してね．公職追放解除で参院議員をやってた．そのころ本屋行くと辻政信の戦争中の極秘情報本みたいなのが横積みにしてあってね，超有名人やった．それであるときその辻がうちに来たんやなあ．親父が僕を呼んで合わせた．「勉強しなさい」って頭を撫でてくれたね．

**高橋：** 石原莞爾は会ったことあるんですか？

**佐藤：** ないです．ただね，石原が下野して山形県に帰って，山形県でも庄内の方でうちとは遠いんだけね．東亜連盟は山形県全体の組織活動だったじゃない．うちの親父もアクティブで，その地域のまとめ役だったんじゃないですか．親父の丸文製材の材木置き場みたいなところで，石原莞爾がそのへんの青年を集めて演説してる写真とかあるんだけども，僕は全然知らないですね．

**高橋：** それで石原莞爾と縁があったわけですね．

**佐藤：** 今から考えると，うちの家は，一風変わった，非常にファンタスティックな世界やったな．ちょうど景気がよかったのもあるでしょう．まあ親父はじっとしておれないみたいな感じやったね．だけど僕はほとんど親父とはしゃべったことなかったです．親父は若いときから青年団長とか村会議員とかしていて，僕が大学院のD1のときに59歳で亡くなるんだけど，その頃は県会議員に出馬するとか新聞の下馬評に出ていたね．死んだときは現役の白鷹町町議会議長で小学校での町葬でした．

で，また政治家にも入れあげていて，米沢地区には木村武雄っていう戦前からの代議士がおったんだけど，それに入れあげてたな．さっき言った辻政信は木村の選挙応援演説で来てたんですよ．

**高橋：** 国会議員ですか？

**佐藤：** そう，戦前からの代議士ですよ．

**高橋：** そういうお父さんを見て，やっぱり影響受けるものですか？

**佐藤：** ほとんど家にいないからね．それくらい忙しくしていたね．それからさっき言った親父の姉，僕の伯母さんは学校教員上がりで，その連れ合いは校長上がりで終戦直後しばらく村長やってたな．だから伯母は村長夫人で，あの地域のインテリ婦人だった．まあ手八丁口八丁みたいな人やったね．終戦間際は国防婦人会長で，戦後は民主化婦人会長みたいな，どっちでもできる（笑），そんな人やった．

**高橋：** じゃあお父さんの兄弟はみなさん活発で．

小学2年生　前から二列めの二人の右側が佐藤氏（佐藤氏提供）．

お父さんは，自分の弟を大学に行かせたわけですよね．自分の子供にもいい教育を受けさせるとか，そういうのはあったんですか？

**佐藤：** 教育には，学歴みたいな意味で熱心だったんじゃない？　いち早く長男も大学にやったんですわ．田舎ではあの頃珍しかった．長男は旧制で，大学行くのが数％の時代でしょ．中学出て，今の山大（山形大学）の工学部になった米沢工専（米沢工業専門学校）に行って，その後で明治大学の経営学部に入ってるんですね．でも女の子は学校行かんでもええって感じやったね．それで旧制の女学校や新制の高校止まりだった．僕より下の妹は時代も変わったからその上に行ってますけども．そいで次男は新制の明治大学工学部を出て，国鉄に入って建築方面の仕事をしてたね．あれ，何で明治かというと，その当時僕は知らんかったけども，木村武雄が明治出身なんですよ．昔はそういう繋がりで世の中動いてたんだと思う．

**高橋：** ああ，そういうつながりで．相当影響力のあった方なんですね．

**佐藤：** そうでしょう．金もうけ的で汚いけど有名みたいな（笑）．だから田中角栄とかの先輩みたいな人やね．あれよりずっと年齢は上だけど．

**高橋：** お兄さんからは何か影響受けたりはされたんですか？

**佐藤：** あのね，全然弟に声かけるなんて感じのない人たちやったね．

**高橋：** どのくらい離れてるんでしたっけ？

**佐藤：** 一番上とは八つ，二番目とは六つ．

**高橋：** ではお兄さんが大学に行くときはまだ小学生だったわけですね．

**佐藤：** そうかな．大学は東京だからもう家にはいない．ただね，影響あるのがね，兄貴たちはラジオ作りが趣味だったんです．それで二階の廊下に大きな作業テーブルがあって，そこに電気が引いてあって，ハンダゴテとか真空管とかが珍しくあったんです．米沢工専に行ってたのもあるんでしょうが，二番目の兄もやってたみたい．長男は米沢工専と関係なく明治大学では文系に行ったんですよ．それで普通に会社に勤めていたんだけど，家業の後継ぎのため呼び戻されて継ぐんです．

**高橋：** 材木屋の．

**佐藤：** もうその頃は材木屋というよりは，建設土木屋みたいなね，もう材木なんて買う人いなくなっちゃってるから．それでね，戦後日本の社会の歴史をやってる人に調べて欲しいんだけど，新制中学というのができたでしょう．日本で一斉に作ったんです．

**高橋：** 義務教育になるってことですよね．

**佐藤：** うん，それで一挙に作らんといかんわけでしょ．だからものすごい建設ブームで，全国津々浦々に土建屋ができたんです．それで戦後，土建国家やとかいわれて，その後も土建業者を潰すわけにいかんから公共事業をやったんじゃないかと思う．ほんまに調べて欲しいね．

**高橋：** ああなるほど．佐藤さんは新制中学の最初の頃ですか？

**佐藤：** そうです．最初か2番目かあたり．

**高橋：** じゃあ新しい建物で．

**佐藤：** ええ，あっちこっち言われて2回移転した記憶ありますよ．

## ●終戦

**高橋：** 終戦のときはまだ小学生ですよね．なにかその辺りの記憶はありますか？

**佐藤：** うん，ある．2年生の夏が終戦日．前後覚えてなくても，その日のことは覚えとる．それは暑い日でね，あらかじめ知らされてるから，製材工場で働いてる人全員並んで，ラジオを置いて聞いた．近所の人も口伝えで聞いて聞きにきてたんじゃない？　割合大勢で集まっていたという記憶があるな．

**高橋：** そこに佐藤さんもいらっしゃったわけですね．

**佐藤：** 僕も，うん．

**高橋：** それで玉音放送を聞いて，どうでした？

**佐藤:** うん，なんもわからんけども，戦争に行かんでいいんだという気はしたね．戦争行くって死ぬことなわけ．その頃はそれが当たり前のことで．当時のことを何かに書いたことあるけど，戦争行って死ぬ，そんなことはわかってる．子供心に恐ろしいのはね，弾が当たってから死ぬまでの痛さね，それをどうこらえるかみたいな悩みね．

**高橋:** 痛くて苦しむのが恐ろしいと．

**佐藤:** うんうん．今でも「年寄りピンコロリがいい」なんて言うじゃない．その死の手前の恐怖があったね．それとね，駅前に住んでると，終戦前後からほんまに毎日のように戦死の遺骨を迎えるセレモニーが駅前であった．村役場の代表，駐在巡査，駅長なんかが揃って白い手袋したりして，遺族が受け取るというセレモニー．それをよく見てた．

**高橋:** 自分もいつかああなるかもしれないと？

**佐藤:** うん，それは当たり前って（笑）．1年生の頃ね，虫歯で歯医者に行かされた．そのときの痛さとね，さっきの弾が当たってから死ぬまでの痛さとが重なって…（笑）．

**高橋:** ああ，その歯医者は痛かったんですか．

**佐藤:** すごい痛かった．一番上の姉に連れて行かれるのが今度何曜日だとか察して，その朝に家出したりしたけど，すぐ捕まった（笑）．

**高橋:** 終戦になってガラッと変わるっていう雰囲気は感じましたか？

**佐藤:** まあじわじわだね，そこはね．ガラッとっていう意識はなかった．駅前で遺骨がくる光景がしばらく続くでしょ．終戦後の方が多いくらいやから．だから終わったんだという感じはしばらくなかったね．そのうちその白い遺骨が一段落したあたりから今度はね，ヤミ米．駅前でヤミ米運びを警察が捕まえる活劇みたいなのがよくあったなあ．

**高橋:** それはお米を背負って逃げるってことなんですか？

**佐藤:** そうそう．それで警察と追っかけっこやるんです．自動車なんか滅多になくて道も舗装もされてないわけやから，町から町へ運ぶには鉄道しかなかったんやね，あの頃は．

**高橋:** じゃあ戦死者の遺骨とかヤミ米とか，駅前に住んでて社会の動きがわかるわけですね．

**佐藤:** そうそう．

**高橋:** 佐藤さんの家は食糧には困らなかったですか？

**佐藤:** なんも．僕は戦後の窮乏は味わっていないですね．戦後はいいことばっかり，子供的にはね．終戦直後はね，教科書に墨を塗るってよく言われる．あれは記憶ありますね．まだ2年生だから，価値観の転換とかそんな意識はなかったね．だけどみんな一緒にやらされたね．

**高橋:** それは歴史の教科書とかですか？

**佐藤:** いや国語だったんじゃない？　国語っていうか読本．

**高橋:** 兵隊さんの話とか….

**佐藤:** そうそう．

**高橋:** 小学校の生活はほかに何か思い出がありますか？

**佐藤:** 僕は学校の記憶が薄いんですよ．隣近所の遊ぶ友達にはよく駅員の子とかいた．官舎に住んでたから，みんな土着の人じゃなくて転勤族なんです．だから延々一緒だったという非常に濃い友達とかはいなかった．

**高橋:** 引っ越しちゃうわけですね．

**佐藤:** 相手が引っ越すわけですわ．それで疎開で来てる子もある期間遊んだ人はおるけど，その人たちが今どこにおるか知らん．そんな感じで子供の頃の幼友達とかいないね．不思議な環境やったと思うな．

僕は年寄りになってから田舎の同窓会とかに行ったこともあるんだけども，ほとんど学校の先生の名前って覚えてない．だからあまり目立つ子供ではなかったと思うけど．運動もほどほどだったし，絵とかも時々賞を貰って褒められたり．

**高橋:** 算数が得意とかそういうことは？

**佐藤:** その頃はなかった．だいたいオールラウン

ドにできたけれども，級長になるみたいな感じじゃなかったんだと思う．僕が小学校の上級だったころの担任の先生は作文教室に熱心な人でしたね．で，作文を書いて，それらを集めてきれいなガリ版の作文集ができてくのを手伝って感激した覚えはあるね．作文教育で全国的に有名になる無着（成恭）先生の「山びこ学校」は山一つ越えた山元村でしたね．

**高橋：**佐藤さんは本をたくさん書いてらっしゃるじゃないですか．子供の頃から文章を書くのは好きだったんですか？

**佐藤：**いやまだそのへんは特に意識してない．高校のあたりからいろんな知識欲に燃えてたけども．だから親もこっちを長期的にどうするなんて考えたこともなかったんちゃうかな．なにしろ兄弟がいっぱいおるからね．それなりに親はちゃんと責任もってやってるんだけど，順番があるからね．

## ●高校入試と模擬試験

**佐藤：**それで親が急に僕を特別に見るようになったのは，高校受験です．

**高橋：**中学の時に成績がよかったということですか？

**佐藤：**中学の成績は何ていうものでもなかったんじゃない．それに成績なんて親も見てもみなかったでしょ．僕もあんまり記憶ないですね，自分の成績．それが高校の入試で，長井高校っていうんですが，その頃新制高校に行く人は半分くらいにはなってたかな．ぎょぎょっと増えたんですね．そんな中で医者の子とか，今でいう大学進学するのを目標にする人は米沢まで行ったんです．興譲館高校って，今も進学校やけど．長井高校っていうのは，大学へ行くと決めて高校に臨む人ではない人が行く高校です．

**高橋：**まあ普通の高校ということですか．

**佐藤：**普通．普通以下っていうかね．そしたらなんであんなのがばれるのか知らんけど，高校の入試の結果を親が聞いてきた，どっかで．それで2番やとか言うてね，だから高校入試で目立ったんです．親も初めて意識したんじゃないかな．僕もそれからは意識したんです．学者になるとか，ほかの世界とかに行ってみたいという気もあったから．まあ俺できるんだって感じかな．

**高橋：**それまでは，別に自分は普通だと．

**佐藤：**普通にただひょうひょうと生きてるという感じやったね．それでうちの父親も割合学歴は好きだったから，ものすごく僕にそういう喜びの感情を示した．あれがものすごく強烈やったね．

**高橋：**高校入試の成績がよかったと．

**佐藤：**うん，それと大学受かったとき．とにかく帝大とそうでないのという分類やから，うちの親っていうのは（笑）．

**高橋：**じゃあ高校時代に，大学に行くことを意識するようになったんですか．

**佐藤：**そうですね．その頃からある程度学者になるとか，学者とは何なんだろうみたいな，周りに全然いないからね．郵便局員みたいなんかなあみたいに思ったこともあったし．それで高校では，あの頃そういう入試の順番っていうのはなにかみんなも知ってるみたいやったね．だから，入ったときからちょっとこう好奇の目で見られてるみたいで．

**高橋：**一目置かれていると．

**佐藤：**うん．僕も割合そのへんから意識しだしたね．

**高橋：**なんか好きな科目とか，そういうのはあったんですか？

**佐藤：**いや，好きとか嫌いとか，特にないですね．高校に入ったあたりからだんだん自分で本買って読書みたいな，そういう意味で買って読んだのは，歴史ものですね．特に近代史っていうか，やっぱり戦争の歴史っていう．石原莞爾って何者かとかね，必死になって読んだですね．

**高橋：**その頃に歴史に興味を持ったと．

**佐藤：**うん．その辺から読書が広がったんです．江戸時代まで広がるんだけど．やっぱりあの戦争のオリジンみたいなのと，石原莞爾の肖像ってい

うのがなにしろ家に帰るとデーンとあったから．そこらを結び付けるみたいな．

**高橋：**戦争当時は子供でわけがわかってないわけじゃないですか．で，ちょっと大きくなってやっぱりあれは何だったんだろうっていう思いだったんですか？

**佐藤：**うん．それがわからないと飯食えないというわけでもないようなことへの知的関心っていうのはそのへんから始まったですね．で，だんだん広がっていって．

それで2年生のとき，あの頃珍しかったんだけれども，僕より一級上で後に山大に行った人がいて，その人が3年生で模擬試験みたいなのを受けるというので，教員が僕にも一緒に受けさせたんです．で，そしたらすごくよくてね，そのあたりから学校の教員もなんか意識するようになったですね．

**高橋：**2年生の時に3年生向けの模擬試験を受けたってことですか？

**佐藤：**うん，なんか教員が受けさせた．あの子よくできるってなってたんやろなあ．

**高橋：**習ってないことが多いわけですよね．

**佐藤：**うん．だけど習ってもできない人もいるんだからね．

**高橋：**習ってなくても結構できたっていうことなんですね？

**佐藤：**数学はそうですね．割合，そのへんから目立ちだしたね．それでね，だいたいあの辺では理系なら自宅から通える米沢の山大の工学部行くんだけども，そうでなくて京大行くとかいうのを意識しだしたね．行けんじゃないかみたいな．だから高校の2年あたりから『蛍雪時代』っていうのを買って購読したんです．

**高橋：**受験の雑誌ですね？

**佐藤：**受験の雑誌．それと旺文社が出してる大学受験問題集とか，こんなん分厚いね．あれ面白くてしょうがなかった，読んでて．主に歴史とか国語とか．

**高橋：**問題集がそんなに面白いんですか？

**佐藤：**国語の問題っていうのはだいたい文章を引用するでしょ．夏目漱石のこの文章を持ってきて，とか．

**高橋：**ああ，引用されてる文章を読むっていうことですね？

**佐藤：**うん．

**高橋：**じゃあだいぶ断片的なわけですよね．

**佐藤：**そうそうそう．そういう読み物やとね，心に深くしみ込んで…．それとか，歴史なんかは細切れなクイズ番組的な知識やなあ．だから雑学やな．細切れの雑学みたいな，あれ面白くてしょうがなかった．だからね，今でも僕はある本全部読むのが少なくて，一部だけ読んだりするのはね，あのへんから始まったんじゃないかと思うけど．旺文社の全国入試問題集とかいうのが愛読書やった（笑）．その頃から僕と同年の周りのあたりとはちょっとずれてきたんじゃないかな．高校のときも勉強好きやったから．

それで世の中は，たぶん僕の中学から高校にかけて朝鮮戦争の時期で，うちの工場も特需でもう猫の手も借りたいみたいな，忙しい時期があった．僕もそれに借り出されて．その頃僕は本を見るのが好きで，家に帰ってそうしようとしてると，工場の仕事を手伝えと怒られてね．それでそのとき僕がお袋に何かちょっと口答えして，そしたら親父が出てきて言った名セリフがあるんですけど，「何のために学校にやってるのか」って言うわけですよ．「勉強するためにやってるのに，家に帰ってまで勉強するやつがおるかー！」言うて怒られてね（笑）．

**高橋：**家では家の手伝いをしろということなんですね．

**佐藤：**後から考えるとなんでって．そんな感じやったね．

**高橋：**それでさっきの受験雑誌とかで自分で勉強してたってことですか？

**佐藤：**自分でやってたね．学校行ったって，受験指導なんて特になかったから．

高校時代の気象部　ワイシャツ姿が佐藤氏（佐藤氏提供）.

**高橋：** 長井高校からは大学に行く人はどのくらいいたんですか？

**佐藤：** うーん，当時，まあ1割弱じゃない．だから約200人おったんでしょうから20人かそこらじゃない．大半が山形大教育学部，地元の教員になるコースだよね．

**高橋：** 高2でどこか，東京か京都か，そういう所に行こうと？

**佐藤：** そうですね．それで僕の姉で東京に嫁に行ったのがおって，亭主は大学出て東京で会社勤めの，割合ハイカラな姉たちで．それで僕が高校でよくできる，というふうになったもんだから，その姉たちが「東京に来ると予備校っていうのがあって，模擬試験というのがある．いっぺんタッカに受けさせてみたら？」って言ったんですよ．僕は「タッカ」と呼ばれていたんだけど．それで東京に行って，姉の家に泊まって，神田あたりの予備校で模擬試験を受けたんですよ．そしたらバカよかった．それから京大行こうとしたですね．

**高橋：** それは高2くらいですか？

**佐藤：** 高3かなあ．いや高2の終わり……，2回ほど受けました．最初神田のあたりに行って受けたのと，二番目は井の頭線の永福町にあった予備校だったなあ．井の頭線の浜田山に姉の家があって，隣にその予備校に行ってる学生がいて，彼と一緒に模擬試験に行った．それであのへんにある予備校になったんだと思う．それも結果は割合よかったね．

## ●湯川秀樹の京大へ

**高橋：** それで自信がついたわけですね．でもなんで京都なんですか？　東京でなくて？

**佐藤：** うん．どこ受けるって考えると，京都には湯川秀樹というのがおって，みたいなのを思い出すわけやわな．なんかおとぎ話みたいなのとつながるんじゃないかみたいなのは意識しだしたです．あの蔵書の件で芽生えたファンタステイックな，身近でない世界への入り口みたいな感じですね．

**高橋：** 今までの話だと，あんまりそういう理系とか自然とかには特に興味があったというわけでは…….

**佐藤：** 自然は特に関係ないね．ただ数学は，高校に入った頃から意識しだしてたから，うん．入試で2番っていうのも，そのへんでよかったんでしょうから．

**高橋：** じゃあ物理に興味があったっていうよりは，そういうすごい人がいるっていう感じなんですか？

**佐藤：** うん．物理というのはあんまり高校の時も意識したことはなかったですね．高校のときの僕，割合熱心に気象部に入ってたね．気象部ってのは百葉箱があって，それを順番に開けてこう記録をつけていく．あの頃なんていうか，根性を養うみたいにきちんと毎日決まった時刻にするとかいう癖を，そういう几帳面さを身につけるみたいな，そういうので割合熱心な教員があの高校におったんやと思う．

**高橋：** 湯川秀樹が素粒子とかいうことは知ってたんですか？

**佐藤：** いや知らない．ただ1954年のビキニ事件の報道以後は，原子と湯川の関係を知った．それまでの物理教科はレンズの話とかで，特に好きだった記憶もないなあ．世間で物理と原子力ブー

ムが結びつくのはこの時期以後のことですよ．

**高橋：** じゃあとにかくすごい学者がいるんだというので？

**佐藤：** うん，世界的なというので．

**高橋：** ノーベル賞を取ったときはまだ小学生くらいですか？

**佐藤：** そうですね．小学3, 4年だと思います．ただね，世間でみんな年表だけ見て誤解してるけどね，湯川秀樹ってその頃日本にいないんだよ．

**高橋：** アメリカですか．

**佐藤：** うん．1948年にアメリカに行って，2年目でコロンビア大学に移った直後やね，9月だから．だからニューヨークからストックホルムへ行ってニューヨークに帰ってるのね．

**高橋：** じゃあ取ったときは全然日本には来てない．

**佐藤：** しかもそういうニュースって外電（外国電報）だよ，あれ．まだ日本は独立してないから，占領下やから．ニューヨークにもまだ特派員とかいないの，きっと．ましてやストックホルムで追っかけて写真撮るなんてのもない．全部外電でロイター通信の写真とかでしょ．だからなんか今の感覚とは違う．当時は新聞しかないわけやから．それでも大きなニュースやったね．大きかったです．それは古橋・橋爪とか並に…….

**高橋：** 水泳の．

**佐藤：** 日米対抗みたいなので勝ったっていう．それと同じ年のニュースやわな．初めて世界に躍り出たみたいな．で，湯川秀樹がいろんな学校に行って講演しただの，それから彼の書いた文章が新聞に出たりだのというのは，彼が日本に帰ってからなんですよ．1953年の夏，日本に帰るんです．だからそのあたりから僕は湯川秀樹っていうのは知ってた．

**高橋：** それが高校くらいですか？

**佐藤：** うん，中学校の終わりか高校のころ．だから年表ではわからない，そういうのは．

**高橋：** 一応1949年当時も騒ぎになったというか，盛り上がったんですか？

**佐藤：** うん，大きく写真は出たね．だけどそのときはまだ関係ないみたいな世界やったから．

**高橋：** ノーベル賞ってのはみんな知ってたんですか？

**佐藤：** 大多数の国民は知らんかったと思うね．

**高橋：** でもなんかすごいっていう？

**佐藤：** 世界的ということでしょう．だから同じく世界的な古橋とどっちが偉いかみたいになる（笑）．今でいうと梶田（隆章）さんと羽生（結弦）さんとはどっちが偉いのかみたいな．

**高橋：** 山形には来たことなかったんですか？

**佐藤：** ない．ずっと後で僕が基研におる頃こんなことがあった．基研のお茶の会のときに，地方から来てた僕らの同世代のある研究者が湯川と同じテーブルになって，湯川に向かって「僕は先生のために昔えらい目にあったんですよ」って嬉しそうに語りかけてた．湯川がどっかの中学か高校か，講演会に行くとそこの生徒は朝から便所掃除させられたらしい．だから天皇陛下が行くみたいな雰囲気だったんだろうね．

**高橋：** お迎えするために．

**佐藤：** うん．で，そいつも影響受けて結局理論物理になって顔合わしてんだけどさ（笑）．それでなんか便所掃除させられたとかね．講演会に行くのはだいたいその県の大学の付属学校が多かったみたいやな．

**高橋：** いろんな県をまわってたんですね．

**佐藤：** そうみたいだったね．結構明るい話題なので，時々新聞に出ましたよね．そのへんから京大行くの，湯川で決めた感じやったな．

**高橋：** それで京大理学部にしようと？

**佐藤：** うん，そうですね．でも先輩も誰もいなかった．だから何もツテがないから『蛍雪時代』で入学試験用の宿の広告に申し込んで，まあ行ってみたら1部屋に6人，畳の部屋で．日頃学生を下宿させてる下宿屋さんが，学生が帰ってるころにちゃんと商売してたんやなあ．だから吉田の大学のすぐ近くやったけど1部屋に6人やった．明

日試験やいうのに，こういうふうに3列になって．それで受けて，結果はもう1つ掴めなかったね．受かったのか受かってないのか．

**高橋：**できたっていう感触はなかったんですか？

**佐藤：**なかったですね，うん．ないけども失敗したっていうでもない，なにしろ相手のある話ですからね．で，二期試験，今度は米沢の山大．これは落ちるわけにはいかんやろな，みたいな感じで帰ったらまた受験勉強やってたね．昔は一期試験と二期試験と間を置いてあったわけです．

**高橋：**それは後期試験みたいなものですか？

**佐藤：**いや，国立大学は一期校というのと二期校があって．

**高橋：**この大学は一期とか二期とか？

**佐藤：**一期校，二期校でちゃんと格差があるの．一期校落ちた人が二期校を受ける．

**高橋：**それはレベルの高いところが一期校ということですか？

**佐藤：**もちろん．だから一期校二期校って言い方は，そうでなくなってからもしばらく言ってたけどね，うちは一期校や言うて．

**高橋：**東大，京大，旧帝大とかが一期校で，山形大は二期校ということですか．京大の結果がわかる前に山形大の試験ですか？

**佐藤：**いや一期がわかってから二期です．だから山大は結局受けなかった．だけど京大の試験が終わっても，山大があるかもしれんからまだ受験勉強してたということ．

**高橋：**ああ，わかる前までは．それで受かったと．そのときはどうでしたか？　お父さんがすごい喜んだということでしたね．

**佐藤：**うん，いや僕もやったーいう感じやったね．京大行くとかなんとかというのも親と事前に一言も交わしたことない．一人でしこしこ準備した．もちろん親には言ってたけど，見当のつかない話だから判断できなかったんやね．ただそら経済的には十分いける家やと自覚してた．そういうのは，高校生にもわかる時代やったから．

## ●朝鮮戦争と占領期

**高橋：**先ほど朝鮮戦争の話が出ましたけど，佐藤さんが中学生とか高校生の頃ですよね．その頃になると朝鮮戦争って何かっていうのもわかってくるわけですか？

**佐藤：**それはわかる．始まったのは中学生のときやったね．朝鮮戦争は初めのあたりが盛りで，後はダラダラでしたけどね．学校行くと，子供どうしでいつもその話で持ちきりやったね．国境挟んで行ったり来たりのほんまに激しい，サッカー観てるくらいにドラマティックで．昨日なんとかだったよ，お前それも知らんのか，とかって子供どうしでやってたな．

**高橋：**それは割と傍観者的な？

**佐藤：**そうです．軽い話題やったね．今でいうサッカーの試合みたいなもんでしょ．

**高橋：**まあ日本は直接は……．

**佐藤：**関係ないから．まあ特需でどこも金回りはいいみたいやったし．あの朝鮮戦争，そんなに長くはなかったよね，あっという間．年表で見ると割合長いけど，激しいのは初めの方だけで，後は膠着状態ですよ．それでうちは朝鮮戦争の特需で儲かってて，その頃なんか猫の手も借りたいみたいに忙しい時期が半年あって，目まぐるしいんだ．僕はこういう記憶ありますわ．スノコ（簀の子）を組み立てる材木のセットなんだろうな．板と横木をきちんとこうコンパクトにまとめてね．それを組み立てるのに20本クギがいるので，それを白い布袋に入れて．今ならホームセンターで売ってるようなのをセットにする作業です．僕はクギを数えて袋に入れて，そこに詰める作業を毎日のようにやらされてた．

**高橋：**中学生で？

**佐藤：**高校か中学かはっきりしないけども．それでまたあっという間にその仕事なくなったりするんだけどね．とにかくなんかこう目まぐるしいあれやった．

中学時代　米軍払い下げのジープで，左端が佐藤氏，右から二人めが父親（佐藤氏提供）．

**高橋：** 朝鮮戦争の間に日本は独立しましたよね．そのときはどうでしたか？

**佐藤：** 独立はね，休みだったのは覚えてるけども，あんまり意識ないですね．

**高橋：** その前の占領期はどうだったんですか？占領されてるっていう感じはありましたか？

**佐藤：** それはある．あのね，占領というよりは，アメリカ人がああいう田舎にまでやってきたから．ジープから降りてそこらに子供らが集まってきたら，鉄砲撃ってみせた．それは感動やったね，ほんまに．それからその連中は単に通りかかったんじゃなくて，学校敷地の造成，山を1つ崩して運動場を作るのにやってきたんです．米軍はブルドーザーっていうのを持ってたから．だから町の人，大人もブルドーザーを見に行ったですね．あんなんうわーっと，ものすごいインパクトやったね．あっという間に運動場の土地を作ったんですよ．米軍の兵隊さんです．だから日本にブルドーザーはまだなかったんやろな．

**高橋：** じゃあ占領ってよりは，なんか作ってくれるとか？

**佐藤：** そうです．もうすごい人たちやと．アメリカはすごいなと思ったね．

**高橋：** 割とヒーロー的な感じなんですか？

**佐藤：** うん，ヒーローですね．本人たちもそうだったんじゃないかな．

**高橋：** 子供は戦争の事情がわからなかったと思いますけど，大人は戦ってたわけですよね，その前までは．なんか負けて悔しいみたいな感じはなかったんですか？

**佐藤：** いや，僕らはないし，大人もあんまりなかった感じやねえ．あのブルドーザーは大人も見に来てたから．水筒持って物見遊山的に，みたいな感じやったよ．ぱぱぱぱぱーっとときどき黒い煙吐くんやけど，うわーっと山を崩していくみたいな，いやすごいと思った．すごいね，ああいうのは忘れられない．

（第2回に続く）

謝辞：本活動は天文学振興財団からの助成を受けています．

## A Long Interview with Prof. Humitaka Sato [1]

**Keitaro Takahashi**
*Faculty of Advanced Science and Technology, Kumamoto University, 2–39–1 Kurokami, Kumamoto 860–8555, Japan*

Abstract: This is the first article of the series of a long interview with Prof. Humitaka Sato. He got his PhD under the guidance of Chushiro Hayashi at Kyoto University, and later took over the Theoretical Astrophysics Group as the professor. He has produced a wide range of research results in the fields of cosmology and astrophysics, and in particular, he discovered the Tomimatsu-Sato solution of general relativity, which had a great impact on both astrophysics and mathematical physics. In addition to cultivating many researchers, he has contributed to the management of the Yukawa Institute for Theoretical Physics and Yukawa Memorial Foundation and has also served as the president of the Physical Society of Japan. He has also written many books, not only on astrophysics but also on the relationship between science and history/society, and quantum mechanics. The first article is from his childhood to high-school days, which implies Japanese society during and after the World War II.